第1回下北沢国際人形劇祭2024
DAILY JOURNAL

DAY2
Thursday, February 22, 2024

「オブジェクトシアター」。人形など操られるために作られた物ではなく、普段私たちの周りにある何気ない物も、まるで生きているかのように操ってしまう現代人形劇の手法。スロヴェニアの人形遣いソルツェは、靴の空き箱や、鍵盤ハーモニカのホースなど、普段は日常の風景に溶け込んでいる物に生命を吹き込む。靴箱は犬の頭に、それを持つソルツェの手指は犬の耳に、鍵盤ハーモニカのホースは尻尾に、と、くるくる展開されていく見立てが鮮やかだ。舞台上にいるのはソルツェ一人だからこれは一人芝居なのだが、彼によって操られる物はもはや小道具ではなく、一つ一つが存在感を放っている。ゆえにこの舞台は一人の人間によって構成されているとは思えないほど多様な息遣いを含み、それは次第に観客を巻き込んでますます重層的になっていく。

「子犬」が眠ると、夢の中なのか、人形王国の長が登場して観客に語りかける。「我々を勝手に操る人間に報復を！」。ソルツェの合図に乗せられた観客である私たちは長の言葉に駆り立てられ「人間」にブーイングを浴びせる一方、作中での「人間」は男性の靴であったり顔に見立てられた靴であったりと、一部のパーツだけで表される（「トムとジェリー」における人間の描き方を思い出す）。すると不思議なことにシュプレヒコールをあげている私たちは一体何者なのか、「人間」の顔とはどんな形をしているのか、次第にわからなくなってしまうのだ。人形王国の長に操られている私たち「人間」が、非常に断片的なパーツのみで表される作中の「人間」を見ている内に、「人間」の生来持つ（と思い込んでいる）合理性や論理性を見失っていく。それはプロパガンダ（大戦時に限らない）に飲み込まれ、自らの判断を保留して全体に身を委ねることへの追体験である。

作中では、可愛らしい子犬が生まれ成長していく平和な家庭の風景に、時折プロパガンダと戦争の足音が響く。その重苦しさに耐えかねてか、ソルツェは途中で息切れと咳を何度か繰り返し、鍵盤ハーモニカのホースをまるで酸素ボンベのようにくわえてゆっくりと息を吸う。自分だけの小さな、温かい世界の空気を吸って気を紛らわすのは、この残酷で騒々しい世界に生きていくための手段であり、生命線なのだろうか。イメージによって形作られた断片的な平和の世界と、作中繰り返される激しいリズムに表される外の世界のうねりが、ユーモアと風刺を以て観客にぶつけられる。そこで否が応にも私たちは、この混沌の世界の中で生きる自らの在り方を思うことになるのだ。

大澤萌（デイリージャーナル編集部）

With the end of the prologue, the first act of 'A Dog's Life' unfolds on stage. The primary performance space is composed of simple top lighting, a table, and a handful of props, creating an understated yet compelling backdrop.

The simplicity of the props on the stage successfully sparks the audience's imagination. Dasenka, crafted from yarn within a sea of cotton, artfully captures the softness and fragility of a puppy's existence in that era. Although reliant on prop performance, the focus remains on the performer who seamlessly integrates with the props, such as the pipe of accordion serving as both the trachea supporting Kareru's breath and a method to provide voiceover or engage in dialogues.

Remarkably, all characters, except for the puppet king of Puppetland, maintain an abstract, non-specific puppetry form.

In contrast to the innocence preserved in a puppy's gaze with the absence of war's impact. The fog on the stage, casting an ethereal glow on the lights, simultaneously evokes an atmosphere of war.

In essence, 'A Dog's Life' masterfully weaves together ordinary set design, imaginative props, and thought-provoking symbolism, offering audiences a unique and engaging theatrical experience.

董昱（デイリージャーナル編集部）

メインプログラム　MAIN PROGRAM

犬の生活
Teatro Matita

『犬の生活』の開演前、舞台上では６人の奏者―ヴァイオリン、チェロ、アコーディオン、カホン、ウッドベース、トランペット―によって、タンゴやアイリッシュ音楽などが次々と演奏され、小さな劇場はあっという間に熱く盛り上がった。私も思わず歓声をあげた。

劇が始まると、私の隣に座っていた人は、割と冒頭の方からクスクスっという反応をしていて、客席の所々でも笑いが起きていた。さっきのハイテンションとは裏腹に、私は、なぜみんなが笑っているのか、これは笑っていいところなのか、何がおもしろいのか、全然わからなかった。

～『犬の生活』あらすじ～

箱を抱えた男が、咳き込みながら登場する。ラジオからは、災害、円安、戦争など、先行きの見えない現状を伝えるニュースが流れ、彼は余計咳き込む。肺炎の彼にとっての呼吸器のチューブは、鍵盤ハーモニカに繋がっている。

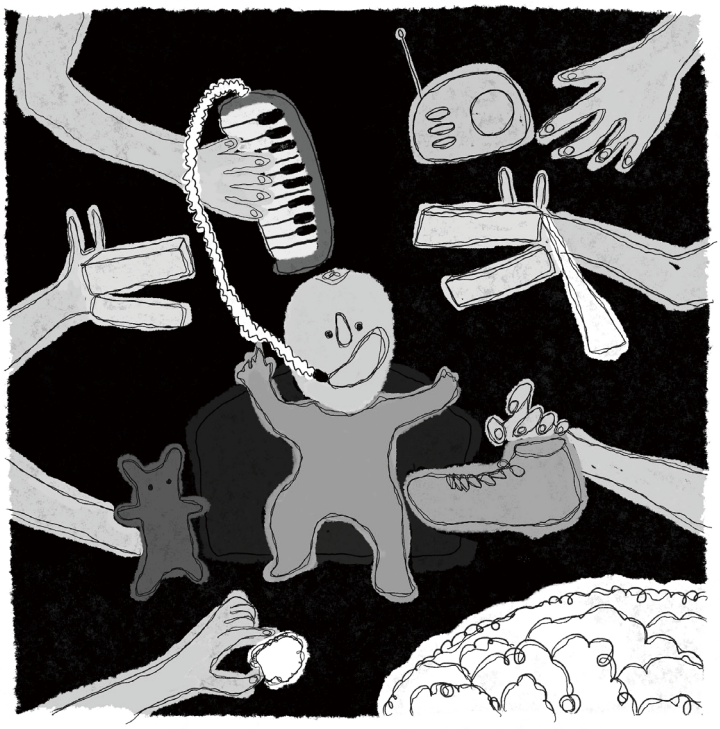
「パパ！」と叫びながら箱から出てきたのは、頭のない子どもの胴体？かと思いきや、幼少期のカレル。父親に子犬をねだる。子犬がほしいという気持ちがあまりにも高ぶり、EDM のビートが生成される。

場面は変わり、検問所で身分証チェックが行われる。オーストラリアから来たという「リンシ」は、身分証チェックに引っかかってしまう。カンガルーである彼のお腹のポケットからは、液体（酒）や刃物（フォーク）、腕時計、バッテリーが没収されてしまう。「保養所」へ向かう列車が出発し、検査官が手を振り見送る。

パペット・ランドの王様（大統領？）が登場する。偉そうに揺り椅子に座って移動する、ちっこいウサギだ。「I' m comming!」と言って、盛大な拍手を求める。人間は我々を操る奴らだ、報復攻撃を行う、と言って、「ニンゲン　キエロ！ニンゲン　キエロ！」とコールを始める。その後、「こんなデタラメに従う国民は、なんてバカなんだ笑」という発言がラジオでオンエアされてしまう。

ラジオを聴いていたカレルはまた咳き込むが、鍵盤ハーモニカを吹きながら、犬のダーシェンカと踊る。そして、綿の山から小さな綿の塊、つまり小さなダーシェンカを手のひらの上にのせ、「私がただほしかったのは ...」と言い残して劇は終わる。彼は肺炎で死んだのではなく、1938 年の闇の只中で、生きることを愛せなかったのではないか、というナレーションとともに。～～

人形劇は、必ずしも子ども向けというわけではなく、大人のためのものでもある、という前説があった。政治批判を、おもしろおかしく、楽しく、笑える劇として鑑賞する。私の冒頭の違和感、なぜみんな笑っているの？何がおもしろいの？という疑問は、私が大人の鑑賞者で、これが政治風刺の作品であり、社会情勢に失望した主人公の物語だとわかっているからこそ抱いた疑問なのだろうか？いや、政治や歴史のことを知らない５歳の私が見たとしても、笑いどころがよくわからなくて戸惑っただろう。



観客が、舞台上の煽りに乗せられ、コミカルな身振りに笑わせられ、スペクタクルに流されているばかりでは、ナチスのような政治を再生産してしまう恐れがある。第二次世界大戦後、舞台上を冷静に観察し判断する観客を育てようとしたブレヒトの功績は、今日のスズナリの劇場ではどれだけ見られただろうか？

とはいえ、意味がわかろうとわからまいと、とにかく楽しそうにすることが観客の役目なのかもしれない。社会の役に立とうと立たまいと、芸術は生き続けるべきだ。芸術を続けたければ、芸術内で批判や喧嘩をしている場合じゃない。芸術を続けるためには、楽しんでいるふりでもいいから、芸術がたくさんの人々の心の癒しになっていることをアピールしなければならない。とにかく人形劇を楽しもう！舞台上のカレルだって、音楽を生きがいにしていたのだし。

結局、全体主義？楽しくなければ楽しくないと語り、間違っていることを間違っていると主張できる場を、芸術が作り出せるはずだ。オープニングで生演奏を披露した Fekete Seretlek の 6 人や、役者の Matija は、観客を楽しませ、親近感を生む技術に長けている。私たちが「良い観客」としてそこに居るならば、彼らの楽しいパフォーマンスを一緒に作りあげることに協力すべきだろう。一方で、SIPF の Web サイトで Matija は「才気とユーモアに富んだ」「スロヴェニア人形劇界のスター」と紹介されている。Fekete Seretlek のメンバーは、多数の賞を獲得している。ある意味、芸術界のトップにいるともいえる彼らを、ただ崇めたり持ち上げたりするだけにとどまってはいけない。パペット帝国のうさぎが「Do you like me?」と尋ねたとき、真っ先に大声で「No!」と叫んだとしても、私たちは楽しめるはずだ。芸術を楽しむ手段は、「Yes」と答えることに限定されない。劇場は実験室だ。観客としての私たちは、これからの人形劇をきっかけとして、楽しむことと違和感を持つこと、その両方を他者と共有する態度を学ぶ余地があるだろう。

和氣光凜（デイリージャーナル編集部）

EVERYBODY'S JOURNAL
みんなの寄せ書き

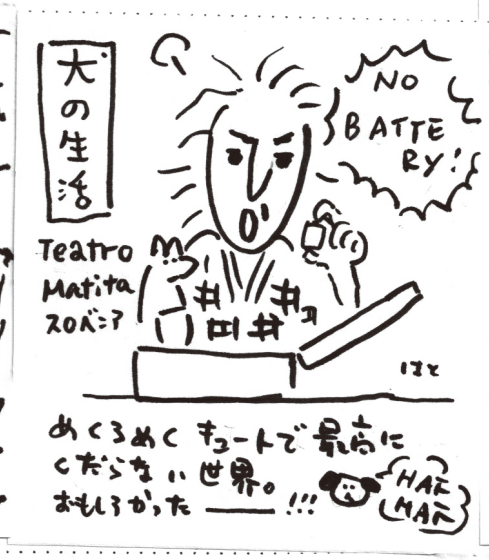
ラジオの音、声、鍵盤ハーモニカ…身近な音だけで音楽と世界が作られ、それらに魅了されました。指や手の動きで表現される人形たちは生き生きとしていてまるで生きているよう。観客の声も舞台の一部となり、話の内容が近く感じられました。

犬の生活 みやすりー

"下北沢国際人形劇祭、とってもとっても楽しかったです!!"
次は何がおきる!? 次はどんなものがアラワレル!?
音楽がユカイに重なって、ドキドキとワクワクがとまらない。どこかとおくのしあわせテーマパークにタイムトリップしたような…想い出に大切に残る時間でした。U25:2000円で観劇できること、感動です。
ありがとうございました!!
うすだ

Thank Teatro
I'm so moved with your show.

Fantastic
satoshi !!

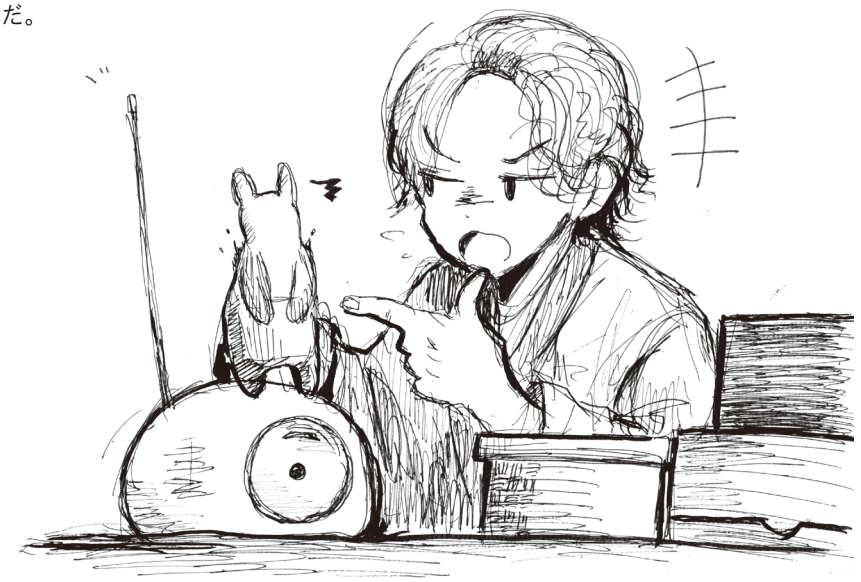


めくるめくキュートで最高にくだらない世界。おもしろかった!!!

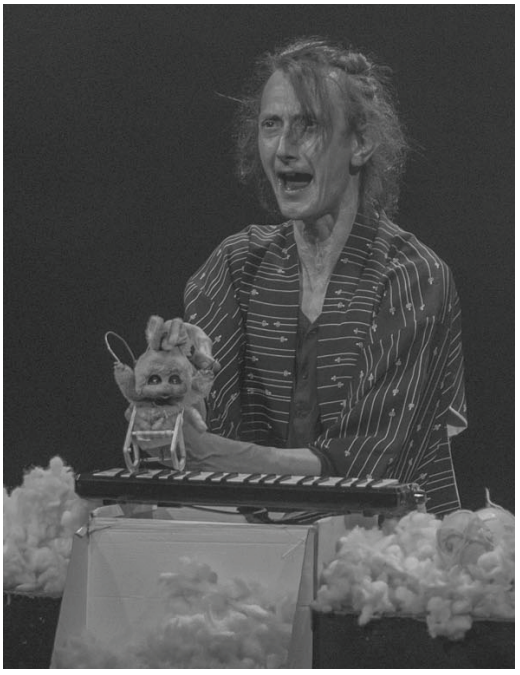
オープニングが素晴らしくcoolでした。シモキタザワ〜という地名がこんなにも音楽的になるとは…と驚きましたが、劇が始まりシモキタザワだけでなく、あらゆる音が、物が変身してゆく様子に集中力がときめきまされていく思いがしました。戦争に温暖化、自然災害…世の中は負の空気であふれていますが、こうして表現されるものから一人一人が何かを感じることが、社会に一石投じる最初の一歩になるのかもしれないと感じました。

OPENINGの演奏で一瞬のうちにスズリの空間の空気が軽やかな自由さに満たされました!これからの7日間がたのしみです!
Izumi

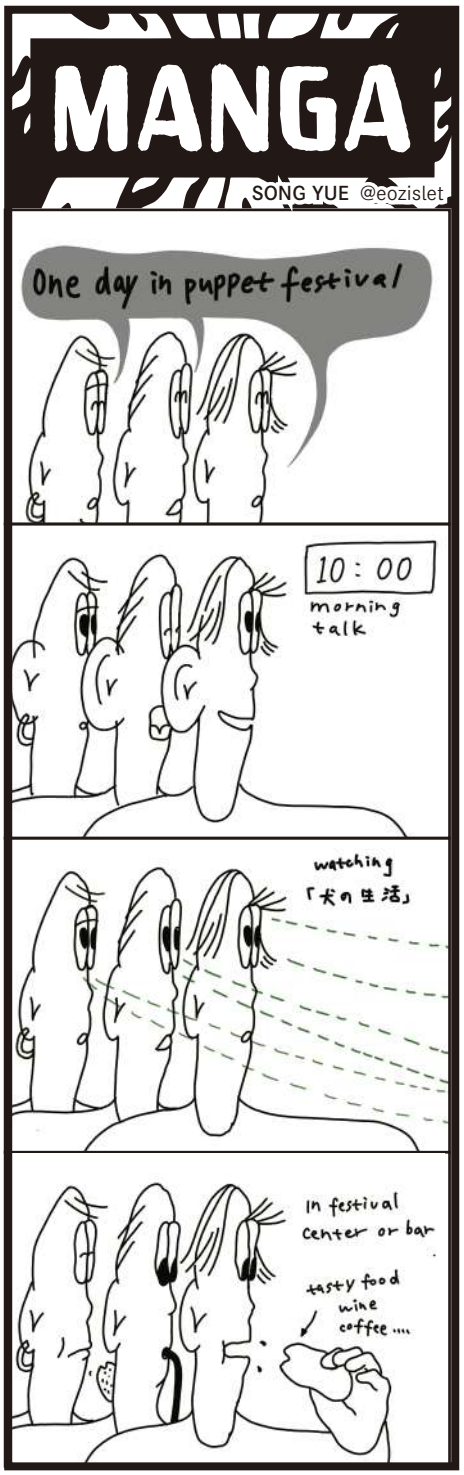
性格の悪い人間の中には、人は好きだけど人々は怖いタイプの性格の悪い人間がいて、チャペックも間違いなくそうだと思う。
そしてそのような人は不思議と犬を信頼する。きっと彼らが、人を人々の間から連れ出してくれる生き物だからだ。
原作「ダーシェンカ」を開くと、全編通して貫かれる犬への温かい眼差しに涙が出そうになる。チャペックなのでどうやって思いつくんだ的な皮肉な言い回しも散りばめられつつ、だけどそこにはひとつの命の成長への謙虚で正直な祝福がある。
……不吉なものが紙の箱を這い回る。箱の内からは、生まれたばかりの子犬について語る男の声が聞こえてくる。
ソルツェの長い指（本当に長い指）と毛糸が組み合わさってくんくん空気を嗅ぎはじめる瞬間に、手のひらの上でひとつまみの真っ白な綿が慈しまれる瞬間に、ダーシェンカはあらわれる。けれどこの子犬はとても儚い。次の瞬間にはすぐに分解され、新たなイメージが取って代わる。その多くは戦争と支配の影だ。
舞台には複数の箱が登場する。箱は用済みになった存在を片付ける収容所にもなり、外界から大切なものを守る家にもなる。進行するにつれて、箱は外と内を分けるオブジェクトとしての存在感を増していく。劇場も大きな箱なんだということを思い出す。この箱の外の世界で起きていることにも思いを馳せざるを得なかった。
けれど、何度分解されてもダーシェンカは何事もなかったように戻ってくる。小さな体で小刻みに息をする。重たいイメージを帯びていたはずの箱も、その時はダーシェンカの暖かな肉体だ。
世界に対する生々しい緊張感を帯びた作品ではあるけども、一方でそれらをひょいっとすり抜ける、柔らかくて軽いものの存在を見出すことのできる舞台だった。希望はきっとそこにあるのだ。
魚田まさや（デイリージャーナル編集部）



アコーディオンが鳴っている。歌声も聴こえた。目の前には音楽が、いや、自由で、なによりもゆるさのある、演者マティヤ・ソルツェのリズムとテンポが生まれていた。同時に、劇はこの一回だけのものだとも、だんだんとわかってきた。
劇はいつから始まっていたのだろうか。小さなステージ上にはラジオやシューボックスが、どこか、誰かの生活を切り取ってきたかのようにそこにある。ルーパーを駆使した声の多重奏に合わせて踊る指人形は、今このときだけのテンポを刻む。ラジオのアンテナは子犬のしっぽになり、シューボックスが子犬の顔に、身体になったかと思えば次には彼の家になり、そしていつの間にかそれは車体に変わっている。何気ない小道具たちが即興的に変身を繰り返していく様子に、この劇が誰かの生活の中にあるという偶然性と、そしてそこにある不思議な懐かしさを感じずにはいられない。
上演前、ソルツェは、彼自身がプライベートでは子犬の世話をしながら劇のリハーサルに取り組んだことを語った。そして、原作『ダーシェンカ　子犬の生活』を残したカレル・チャペックの生きた1930年代という時代が、今この時代とつながっているという感覚も。この劇は、まさにソルツェがチャペックの生活を今ここに甦らせることで、彼らだけでなく、偶然かつ瞬間的に彼らと空間を共有する私たちの生活に、いつの間にか人形劇がゆる〜く根付いていたことを気づかせる。『犬の生活』は、いつかの、私たちの、生活の延長にあった。
原作を知らない筆者から観ると、場面同士は物語としてのゆるやかなつながりを持っているだけで、それはほとんど断片的かつ唐突に切り替わる。一瞬、場面が変わったことにすら気づかない。そこにあった小道具が今何に変身しており、そして何が起きているのか、常に観る者の想像力が掻き立てられる。油断すると劇に置いていかれそうになって、必死に追いつこうとすればするほど、独特な人形劇の世界へと引き摺りこまれていった。なんとかメモを取ろうとしていた筆者の手は、気づいたときには止まっていた…
高島智也（デイリージャーナル編集部）



初日公演にも関わらず、老若男女や国籍問わずたくさんの方が来場してくださっており、とても賑やかな雰囲気でした。前説で作品のテーマやカレル・チャペックについての説明があったので、観客のみなさんも世界観に入り込みやすかったのではないかと思います。
靴箱や毛糸などを用いて犬を表現するのが、私にとって斬新で印象に残りました。大きさの異なる靴箱を犬の顔や体に、紐や指を耳や尻尾に見立てて、まるで犬が生きているかのように動かすのがとてもおもしろかったです。
個人的に、ダーシェンカが誕生する時の音楽が良かったです。エド・シーランの『Shape of You』のように、ループステーションを使用することで音楽の完成までの過程と同時に、ダーシェンカの誕生やダーシェンカと過ごす日常を楽しむことができました。人形劇のテーマとは異なるけれど、犬好きな方はそういう部分も面白いんじゃないかなと。
気付いたら人形劇の世界観に飲み込まれている、そんな魔法を是非みなさんにも感じていただければと思います。
犬野散歩（デイリージャーナル編集部）



今日の
デイリージャーナル編集部

文：
大澤萌
董昱
和氣光凜
魚田まさや
高島智也
犬野散歩

絵：
有泉拓真
荒木穂香
かろ

インタビュー　Interview
JIJO さん
府金そうたさん
パペットスラム
キュレーションチーム

23 日（金・祝）17 時から開催する、ショート人形劇連続上演『第一回インターナショナルパペットスラム』の日本のキュレーションチーム、JIJO さん、府金そうたさんにお話しを聞きました！

_____昨日のパペットスラムについて話したインスタライブ (@ayajijo) はどうでしたか？
JIJO__私たちが言いたいことは話せました。まずはパペットスラム参加者募集に 48 作品も応募してくれたことへのお礼と、パペットスラムの企画って本当に面白いので、日本でも根付いて欲しい！ということです。
_____今回のパペットスラムですが、応募 48 作品から 5 作品が選ばれたのですが、キュレーターチームで、選定基準はどう設定したのでしょうか？
JIJO__基本的には、人形劇の枠が広がる可能性のある作品、わくわくする作品を選びました。しかし、ほんとうにいろんなスタイルの人がエントリーしてくれました。
府金__キュレーションチームのもう一人のメンバー石川さんが、採点表をつくってくれて、まずは 3 人がそれぞれ採点しました。それを出し合って、審査するのに 2 日間、それぞれ 8 時間くらいかけました。
JIJO__思ったより、3 人の採点に差はなかったかなあ。ただ、ちょっとずつ違う評価の部分が、最終の 10 組ぐらいに絞ってからの選考ですごく議論になりました。
府金__4 組決定の予定を 5 組に増やしたのですが、結果的にバランスよいセレクションだったとおもいます。
JIJO__選考しながら、プレゼン力って大切だな、と改めて思いました。これ、私応募してたら落選してたなと、笑。

_____選ばれた 5 人について一言コメントをお願いします。
角谷将視さん：オブジェクト系、もともとマイムなどを 2 人組でされていた人。
仲谷萌：演劇の人で独特な世界観をもっている。創作する気持ちの丁寧さを評価。
はと：音楽、エンターテイメント、華やか。
役者でない：フィジカル系、なぜか気になる存在。
大谷敏子 /sikakuico：人形作家の空間的な試み。

_____2 人はパペットスラム当日は司会を担当されますね。
府金__はい！司会の練習、明日もやります笑
JIJO__アメリカのパペットスラムをみると、司会がすごく良く話すんですけど、私はあまりテンポよく話すのが得意ではないので、自分なりのやり方で臨みたいです。
府金__日本で開催する新しいパペットスラムの司会として、良い形に行き着いたんでないかな！？と思っています。良い意味で、選ばれた出演者達の表現も、私たちの司会も、見る人がチャレンジしたくなるそんな、親しみやすさ、未完成さがあるのではないでしょうか。
JIJO__そして、日本のいろんな地域でパペットスラムが立ち上がると嬉しいです。

今日の裏方
TODAY'S STAFF

下北沢アレイホール 3F の SIPF フェスティバルセンターは、毎日朝 9:30~ 夜 20:30 までオープンしています。ここのフェスティバル BAR と、デイリージャーナルの発行を担当するリソグラフスタジオ Hand Saw Press のメンバーをご紹介します！

菅野信介 @am_a_lab @handsawpress
料理長：武蔵小山のジャマイカンレストラン「アマラブ」兼、Hand Saw Press の運営
「SIPF の BAR は、野菜たっぷりで健康的なやさしい味に！ 7 日間乗り切ろう！」
FU @___abefu
デイリージャーナルのデザイン・エディトリアルを担うアーティスト・デザイナー
「SIPF のパワフルなスタッフ陣やアーティスト達の裏側の様子もお届けできたら嬉しいです！」
SONG YUE @eozislet
デイリージャーナルの 4 コマ漫画から、デザインから BAR までなんでも担当、美大の修士学生
「初日に見た『犬の生活』は、犬の人形でなく、毛糸とか箱をつかって犬を表現していて感動しました！」
河村実月 @mzk_kwmr
BAR の料理サポート！文藝誌 園 (その) 主宰 @sono_magazine 居間 @_iiimmmaaa_ などで活躍中